

## 胃がん雑感

金山正吾

65日間の病院暮らしには、心底うんざりした。

“文芸”の名に該当しないのではないかというイチャモンを覚悟の上で、「文芸コーナー」発足の賑やかに馳せ参じた心意気を、認めてやっていただきたい。

事の起こりは、去年の秋にある。市の保健センターの胃がん検診を受けた。全くの気まぐれに、である。

たまに会う友人だれもから「お～、元気そうやなあ～」と言われるもので、自分でも すっかりその気になって喜んでいた。「病気には無縁」「癌は他人ごと」「90歳まで死なんような気がする」なんて過信かつ傲慢であった。そんな人間が集団検診を受ける気になったのが、ふしぎと言えれば不思議である。

保健センターから精密検査の呼び出しがあった時も、「お医者さんも、何人かは引っかけないと精がないからなあ」。カミさんと二人で笑い話にしていた。

12月も半ば、紹介をしてもらった公立病院の外科部長の初診を受けた。開口一番「一人で来たのか？」と言う。ケゲンな顔をしていると、「心の支えというか、“付添い”があったほうが安心ではないかと思って」という話。続けて「先日も、診察ベッドから降りて靴を片方履き忘れ、ふらふらと帰っていった人が居た」と。「何年か前までは、本人には告知しないことになっていた。学生の頃から、そう教えられた」という昔話の余談も。爾後“心の支え”を同行することにした。

胃を切ることに決まった時点で、参考までに聞いてみた。「もしも、このまま放っておいたら どうなるか?」。「まあ あと1年やなあ」という脅しが、その回答。巡回の集団検診もバカにしたものでない、と痛感した。

「今どき、胃がんの手術ぐらいは軽いもの」と高を括っていたが、“縫合不全”というアクシデントに振り回される結果になろうとは。術後の回復は順調で、1週間後はおかゆ食、2週間後は普通食となったが、その頃に“胃袋からの漏れ”が確認された。直ちに完全絶食・高蛋白点滴となり、この状態が1ヶ月以上続いた。すき間が自然に閉塞するのを、辛抱強く見守るためである。

空腹はさほどの苦痛ではないが、食事という恒例の行為がないのは、一日がのんびんだらりと続いていて、朝・昼・夜の区切りがなく、大変に不便であるということも 新たに発見した。

その間、毎週の造影透視検査を見ても好結果は期待できず、結局のところ自力で閉塞することは無理と判断し、フィブリン（接着剤）の注入を2度試みた。その結果、決着と相成った。

縫合不全は年に1～2件はあるらしくて、病院側としては困惑の様子はほとんどない。「そのうち必ず治りますよ。こんなことは、いくらでも経験してきたから」。「いざとなれば糊を詰めるから、大丈夫。心配無用」という次第。

今年はとんだ当たり年に見舞われたものだ、と思う。

現時点の診断では、“STAGE 1-B”、5年生存率が90%弱。

“90歳まで生きるかも”という豪語は取り下げて”80歳ぐらいまで“に下方修正し、「日々 ていねいに生きるべし」という 昨今の心境である。